はじめに

本書はメタ倫理学の入門書である。とはいえ、「メタ倫理学」という言葉など初めて聞くという人も多いかもしれない。ここでのメタというのは「後ろ」くらいの意味だ。おおざっぱに言えば、倫理について後ろに一歩下がってあれこれ考えてみる、というのがメタ倫理学である。

たとえば、私たちは日常的にさまざまな場面で、倫理にかかわる判断を目にしたり、実際に自分でそうした判断を下したりしている。

「友達に親切にすることは善いことだ」
「約束を自分の都合でドタキャンするのは最低だ」
「たとえ怒られるとしても、正直に真実を言うことは正しいことだ」
「お年寄りからお金をだまし取るなんて、とんでもない悪人だ」
「金持ちばかりを優遇して、貧乏人を苦しめるような法律は不正だ」
「毛皮製品をつくるために動物を殺すことは非倫理的だ」

「恋人同士の間でもプライバシーは守られるべきだ」
「昼間から働きもせずビールを飲んでいるなんて不道徳だ」
「経済発展で大きな利益が得られるのだから、多少の環境破壊は悪いことではない」
「両親に介護が必要である以上、仕事を辞めて実家に帰るべきだ」
「いじめは悪いことだ」

などなど。

普通の倫理や道徳の議論はたいてい、こうした発言に対して「どうして?」と問いかけることからはじまる。「どうしていじめは悪いことなの?」「あなたがいじめられたらどう思う?　いじめられると、とても辛くて悲しいんだよ」というように。

しかし、ここで、相手がこんな風に食い下がってきたらどうだろう。「いじめは悪いことだと言うけれど、そこで言われている悪いってそもそもどういう意味?」とか「はいはい、いじめは悪いですよ。で、そもそも悪いから何なの?」というように。

そんな風に言われたら、私たちはどう答えられるだろうか。こうした問いは、「いじめは善いことか、悪いことか」という具体的な問いから一歩後ろに下がって、「そもそも善いとは、悪いとはどういう意味か。なぜ善いことをしなければならないのか、なぜ悪いことをしてはいけないのか」ということを考えるものだ。あるいはもっと遡って、「そもそも、何が善いことで何が悪いことなんて、本当に決められるの?」「善いこと悪いことなんて人それぞれじゃないの?」などという問いもありうる。

おそらく、人によっては、そんなこと考えたこともない、考える方がおかしいと思うかもしれない。悪いことをしてはいけないのは当たり前だし、詐欺犯が悪人なのも当たり前だ。しかし、現に世の中にはいじめも、詐欺も存在し

ている。彼らはそれらが悪いことだとわかっていないのだろうか。それとも悪いとわかっていてやっているのだろうか。悪いとわかっているのなら、どうして彼らはそんなことをするのだろうか。

こうしたことを考えるためには、悪いことをしてはいけないのはなぜ、どういう意味で当たり前なのか、ということを問う必要がある。そして、そうした問題を扱うのが、メタ倫理学だ。そのため、本書は倫理学を扱う著作ではあるが、「いじめは悪いことだからやめよう」などの直接的な主張を行うものではない。代わりに、本書で扱う問題は以下のようなものである。

「善・悪、正・不正、〜すべき、などといった倫理にかかわる言葉は、本当はいったい何を意味しているのだろうか」

「「これは善いことなのだろうか」とか「これは間違ったことなのだろうか」「私はどうすべきなのだろうか」のような倫理や道徳の問いに正しい答えはあるのだろうか」

「正しい答えがあるとすれば、それはどうすればわかるのだろうか」

「正しい答えがあるとすれば、それはすべての人にあてはまる唯一絶対のものだろうか。それとも文化や社会ごとのものだろうか。あるいは答えは人それぞれの心の中にあるようなものだろうか」

「正しい答えがないとすれば、それでも道徳や倫理は私たちにとって大事なものであり続けるだろうか」

「そもそも、道徳や倫理はそんなに大事だろうか」

「悪いことや、不正なことはなぜしてはいけないのだろうか」

「倫理的、道徳的な判断と他の判断の違いは何だろうか」

「倫理や道徳は科学によって説明ができるようなものだろうか」

「倫理や道徳について述べたり、書いたりすることにはどんな意味があるのだろうか」

本書ではこのような問いを考えていくことで、倫理や道徳の問題について悩み、葛藤し、答えを求めて議論し、選択し、決断する、私たちの道徳的な営みを、一歩下がったところから、検討していく。そして、単に「当たり前」で済ませられないような倫理的な問題に現実に直面したときに、少し立ち止まって考えるヒントを伝えようとするものである。

本書は三部構成となっている。第Ⅰ部ではメタ倫理学とはどういうことを考えるものかとか、倫理や道徳は人それぞれのものかといった基礎的な事柄を確認する。第Ⅱ部では具体的なメタ倫理学の議論として、道徳的な問いには答えがあるのだろうか、ということを検討していく。第Ⅲ部では、道徳的な判断を下すことや道徳について考えることがもつ意味の検討を手がかりに、最終的に、私たちは本当に道徳的に正しい仕方で振る舞わねばならないのか、どうして悪を避けて善いことをしなければならないのかを考える。

様々な議論を紹介していくにあたり、本書は入門書ということで、可能な限り、倫理学についての予備知識がなくとも理解できるような書き方を心がけた。特に哲学・倫理学における専門用語については、その都度の解説を行った。それでも、議論の運びなどに関して、ところどころやや難しく感じられる箇所もあるかもしれない。それについては、一度ではわからなくても諦めずに、二度、三度読んでもらえると、おそらくだいたいの意味はわかるものと思うので、粘り強くお付き合いいただけるとありがたい。

また、登場する様々な論点について、基本的に、肯定的な意見と否定的な意見の両方を取りあげた。その際、本文中では、必ずしも、この立場は正しい、この考え方は正しくないといった結論は下していない。そのため、読者によっては、結局、どっちなのだという不満を覚える人や、むしろ自分の今までの考え方が揺さぶられてもやもやするという人もいるかもしれない。しかし、（メタに限らず）倫理学を学ぶということは、そういうことである。倫理とは私たちの真剣な生き方を問うものであり、そうである以上、その答えは簡単には手に入らない。誰の人生だってそん

なに単純なものではないのだ。

とはいえ、悲嘆する必要はない。自分がこれまで当たり前だと思っていたことは本当は自明ではないのかもしれないと気づくこと、自分とは違う立場の人も様々な理由があってそう考えているんだと知ること、こうした営みは、私たちの中の凝り固まった偏見や先入観を打ち破ってくれる。そうやって考え方の幅を広げることは、生き方の幅を広げること、今の生き方だけに縛られない、別の生き方も可能なんだと気づくことにもつながりうるだろう。そして、そのようにして得た広い視野は、いろいろな「当たり前」に縛られた私たちの生を少しだけ楽にしてくれるかもしれない。本書を手掛かりにして読者のそれぞれが「そもそも……」と問いを発することで、自分の倫理についての考え方を問い直し、自分なりの倫理の捉え方を探究してもらえれば幸いである。

あとがき

あるとき、私のメタ倫理学の授業を受けた学生の一人に「こんなこと、考えてもいいんですね」と言われたことがある。「こんなこと、考えちゃ駄目なんだと思っていました」と。

そのとき、私は「え、もう一五年くらい、こんなことを考えてきてしまったんですけど、まずかったですか」と少し驚いてしまったのだが、確かに、小中高で習う道徳や倫理、あるいは一般社会においては、嘘をつくのは悪いこと、親切にするのは善いことというのは決まり切ったことだし、善いことをするのは当たり前のことで、「そもそもどうして悪いことをしてはいけないんですか?」「そもそも善いとか悪いってどういう意味なんですか?」などと問おうものならば、よくて変わり者扱い、場合によっては危ない奴と見なされてしまうこともあるだろう。道徳について「そもそも」を問うのは、道徳的に禁じられているように見える。

にもかかわらず、その禁を破って、「そもそも道徳的でなきゃいけないんですか?」と問うてしまうのがメタ倫理学である。そして、本書はそのメタ倫理学の入門書である。

本書は、日本ではあまり類書のないものである。といっても、倫理学全体の紹介の一部として、メタ倫理学も取り

扱う倫理学入門書は数多く刊行されている。代表的なものは以下のものだ。

・大庭健［2006］『善と悪――倫理学への招待』岩波新書
・赤林朗編［2007］『入門医療倫理Ⅱ』勁草書房
・坂井昭宏・柏葉武秀編［2007］『現代倫理学』ナカニシヤ出版
・伊勢田哲治［2008］『動物からの倫理学入門』名古屋大学出版会
・柘植尚則［2010］『プレップ倫理学』弘文堂
・奥田太郎［2012］『倫理学という構え――応用倫理学原論』ナカニシヤ出版
・品川哲彦［2015］『倫理学の話』ナカニシヤ出版

さらに、海外では優れたメタ倫理学オンリーの入門書、概説書が何冊も刊行されている。

・Andrew Fisher [2011] *Metaethics: An Introduction*, Acumen
・Simon Kirchin [2012] *Metaethics*, Palgrave Macmillan
・Alexander Miller [2013] *An Introduction to Contemporary Metaethics 2nd ed.*, Polity
・Mark van Roojen [2015] *Metaethics: A Contemporary Introduction*, Routledge
・Matthew Chrisman [2017] *What is This Thing Called Metaethics?*, Routledge
・Tristram McPherson, David Plunkett (eds.) [2017] *The Routledge Handbook of Metaethics*, Routledge

本書もこうした著作を大いに参考にしている。いずれも本書よりは少しレベルが高いので、本書で学んだ後は、こ

れらの著作に挑んでみるのもいいかもしれない。

他方で、すでにメタ倫理学に馴染みのある読者にとっては、本書の構成はやや奇異に映ったかもしれない。というのも、一般的な入門書においては、歴史的な経緯も考慮して、ムーアからスタートして、非認知主義、指令主義と進み、自然主義を挟んで、実在論・非実在論や錯誤理論を紹介するというのが、王道であるように思われるからだ。

それに対して、本書ではあえて、道具立ての説明である第Ⅰ部の後に、第Ⅱ部として存在論の議論を置き、非認知主義と認知主義、Why Be Moral などをめぐる議論は第Ⅲ部に回した。このような構成にしたのは、一つには、「メタ倫理学って所詮、言葉の問題でしょ」「メタ倫理学は言葉の話ばかりしていてつまらない」という（非常に不幸なことに哲学者の間ですら広く共有されている）主張に対して、メタ倫理学が取り扱う対象はそれだけではないし、そもそもどうして言葉の問題を扱うに至ったのかについての理解抜きにこの学問領域をとらえたつもりになるのは完全な誤解であると反論したいという筆者の思いがある。また、この隠れた狙いを抜きにしても、本書の構成は以下のいくつかの利点を持つと考えられる。

第一に、昨今のメタ倫理学における存在論や認識論の存在感の大きさを反映させること。近年ではメタ倫理学の議論はかなり細分化（蛸壺化）しているものの、その中で道徳的真理の実在を巡る議論は、実在という意味の再考も含めて、非常に重要視されているように思われる。それを反映して、本書でも最初に多くの頁を割くこととした。

それとかかわって、第二に、ムーアの議論の形而上学的含意を引き受けること。メタ倫理学においては、ムーアは自然主義的誤謬を唱えてメタ倫理学をスタートさせた人、終わり、という見方が少なからずあるように思われるが、実際には情緒主義、自然主義も含めて、ムーアに続いた人々は、否定的に捉えるにせよ、肯定的に捉えるにせよ、彼の議論の形而上学的含意をかなり意識していたと考えられる。それが伏流として流れ続けていたからこそ、マッキーの議論にはインパクトがあったし、マクダウェルらも自分の議論はムーア的な実在を前提していない、ということを強調するわけなのである（もちろんそのさらなる背後にはプラトンがいるわけだが、そこまで描ききる筆力は著者にはな

い）。したがって、存在論の話から始めた方が結果として、表出主義や認知主義の話をする上でも、理解に資すると考えた。

第三に、読んでいて個々の理論と他の理論との関係、実践との関係がわかりやすいこと、何より、それぞれのメタ倫理学者たちが何を目指していたのかを一貫した形で描き出せること。本書では、第二章で主観主義、客観主義、第三の立場という形で、メタ倫理学理論を大きく区分した。確かに、これは極めて大ざっぱなモデルであって、いずれの登場人物とその立場も必ずしもこのモデルに完全にあてはまるものではなく、そのような先入観を与えることが初学者にとって好ましくない可能性は危惧される。しかし、他方で、人物本位で様々な立場を羅列してしまうとまとまりを欠き、こうした議論に馴染みのない人が読み進める際に苦痛だろうとも想像した。そうしたことから、一端はこのモデルに従って整理を行いつつ、随時、注やまとめなどで注意を促し、その問題点については入門を終えた先で、読者自身が考えてくれることを期待することとした（その際、客観主義と主観主義を軸とする構成はサイモン・カーチンの前掲書を、相対主義を第I部に置く配列はサイモン・ブラックバーンの『ビーイング・グッド――倫理学入門』（晃洋書房、2004）を参考にした。特に、相対主義を強調した背景には、かつて一緒に授業をさせていただいた金沢医科大学の菊地建至さんが「最近の学生は倫理学を勉強し始めると最初に、相対主義とかがすごく気になるみたいだけど、何かいい参考書ない？」と仰っていたことがある）。本書の執筆に当たっては、正確さと読みやすさ、面白さのバランスをとるべく努力したが、それらがうまくいっていないとすれば、著者の力量不足である。

本書の内容を踏まえつつ、メタ倫理学を倫理学史の流れの中で捉え直したい人は、右で挙げた解説書の他、スティーブン・ダーウォル他“Toward Fin de siècle Ethics: Some Trends”（The Philosophical Review, 1992）などを、より丁寧に勉強するならテレンス・アーウィンの *The Development of Ethics*（Oxford University Press, 2007）などを参考にされたい。

さて、日本のメタ倫理学の研究の歴史は古く、日本倫理学会の年報の記録によれば、一九五〇年代にはすでにヘアの指令主義についての論文が書かれているし、一九五七年にはセラーズとホスパーズ編の*Readings in Ethical Theory*の翻訳も行われている（ムーアについては、戦前の翻訳もある）。しかしながら、私が大学に入学した頃（一九九八年）、メタ倫理学を専門で研究しているという人はまわりに誰もいなかった。もちろん、研究室にメタ倫理学にかかわる文献は一通り揃っていて、それらについての勉強会も盛んに行われていた。しかし、諸先輩方の専門は基本的にヒュームやロック、カント、ベンサムなどのいわゆる古典であり、彼らはそれらメインの研究に加えて、メタ倫理学もできるという超人たちであった。

一方、私は、ヘアについて卒論を書くことには決めたものの、テーマは彼の功利主義論についてであったし、メタ倫理学というものが何なのかもよくわかっていなかった。そもそも、ヘアという人はメタ倫理学の歴史の中でも希有なほど、メタ倫理学と規範理論をつなげて考えていた人である（実際にはムーアもつなげていたが）。そして、彼は現在で言うところのメタ倫理学を倫理学（ethics）、規範倫理学や応用倫理学を道徳理論（moral theory）と呼んでいたので、私はただ単に、他の人と同じように「倫理学」を勉強しているつもりだった。

私がメタ倫理学というものを意識するようになったのは、北海道大学の大学院に進んでからである。その後、受け入れ教員となって下さった坂井昭宏先生は、初めて挨拶に伺った際に、私がヘアについて書いた卒論を見せると開口一番、「僕はウィリアムズが好きなんだよねえ」と仰った（バーナード・ウィリアムズは*Utilitarianism For and Against*などで知られ、ヘアが晩年の回顧録で、自分の一番の弟子にして最大の敵と述べた人物である。なお、ヘアの同僚がヘアの没後に寄せた手記によれば、ウィリアムズはヘアの物真似も得意としていた）。ウィリアムズ&坂井先生には、ヘアの功利主義論だけを読んでいてはとても太刀打ちができなかった。そのため、私はヘアのありとあらゆる文献、とりわけ彼の思想を根底の部分で支えているメタ倫理学にかかわる論文を読みあさることになった。さらには坂井門下には、メタ倫理学をごりごりと研究しているこれまた超人的な先輩方がたくさんいた。彼らの薫陶を受ける中で、メタ倫理

学愛も芽生え、私はいつしか自分の専門はメタ倫理学だと考えるようになっていった。

しかし、私がメタ倫理学を専門にしたといっても、相変わらず日本の倫理学界にメタ倫理学を専門にしている人はそう多くはないし、浅薄、小難しい、実用性がないと言われて、人気もあまりない。そこで、メタ倫理学とはどんな学問で、何のために研究されているのか、彼らは何を明らかにしようとしているのか、といったことをなるべくわかりやすく述べ、少しでもメタ倫理学の魅力を伝えようとしたのが本書である。本書を通じて、少しでもメタ倫理学って面白いかもとか、大事そうとか、もう少し勉強してみようかなと思ってくれる読者がいれば幸甚である。

本書の執筆に当たっては、大変多くの方々にお世話になった。坂井先生をはじめ、京都大学の水谷雅彦先生、北海道大学の蔵田伸雄先生には、常に変わらず気にかけていただいており感謝に堪えない。また、それぞれ非常に忙しい中で本書の草稿を読み、丁寧なコメントをつけていただいた京都大学の安倍里美、大阪経済大学の杉本俊介、創価大学の蝶名林亮、福岡大学の林誓雄、諸氏にも心から感謝申し上げる。彼らのとても厳しくも正確で示唆に富んだ指摘がなければ、本書はかなり悲惨なものになっていただろう。もちろん、それでもなお悲惨な箇所が残っているとすれば、全面的に筆者の責任であることは言うまでもない。

授業などを通じて、下読みをしてくれた熊本大学文学部の佐藤ゼミの学生さんたちにも御礼申し上げたい。特に、中根杏樹さんと松﨑千香さんには、全体を通読してもらって様々な意見をいただいた。彼女らの「ここは意味が分からない・通じない」攻撃がなければ、本書はもっともっと読みにくい、難解なものになっていただろう。また、田中朋弘先生をはじめ、熊本大学の同僚の先生方にも感謝申し上げる。先生方が快適な研究環境を作ってくださっていなければ、そもそも本書は執筆できなかっただろう。加えて、今回も用字用語チェックをしてくれた弟の佐藤薫、今回は神として登場した黒猫のモズクをはじめ、両親、祖母、叔母にも感謝したい。

最後に、メタ倫理学の入門書というどれくらい需要があるのかよくわからない本について、今回もまた「その意気

やよし！」と言って出版・担当を引き受けてくださった、勁草書房の土井美智子さんには、本当に心から感謝している。折に触れての彼女の叱咤激励がなければ、執筆途中で挫けていたかもしれない。同時に、分量が予定の二倍になり、中身も当初の想定より難しくなり、あれやこれやで執筆が遅れたことについては深謝したい。

さて、あらためて、冒頭の発言に戻ろう。道徳のそもそもを問うことを禁じられた世界で育ったその学生は「こんなこと、考えてもいいんですね」と言った。なるほど、誰も道徳に疑問を抱かず、皆が教えられた通りに善いことをして悪いことを避ける。それに反する者は異端として排除される。それでまわる完璧な世界は、万人の万人に対する闘争たる自然状態よりマシなのかもしれない。

しかし、そんな世界は健全なものだろうか。私にはそうは思えない。倫理とは生き方全体にかかわるもの、あるいは生き方そのものなのだから、仕組みが分からなくても動きさえすればいい自動車とはわけが違う。私たちの人生が道を外れたとき、誰も代わりに運転してくれなどしないし、私たちの人生が壊れかけたとき、誰も代わりに修理してくれなどしない。

それとも完璧な世界とそれに従う人生には綻びが生じることなどないだろうか。J・S・ミルによれば、道徳に無謬性を仮定するのは、それこそ他のいかなる場合にも増して、最も致命的なことである。無謬性を仮定し、私たちは決して過たないと考えることは、「後代の人びとの驚愕と恐怖とを引き起こす、恐るべき過失を犯すこと」（J・S・ミル（塩尻公明・木村健康訳）［1971］『自由論』岩波文庫、邦訳五二頁より）であり、それによって歴史上、最も善い人びとは何度も殲滅され、根絶やしにされてきた、と彼は言う。私たちは間違いを犯す生き物である以上、人びとから反省する力を奪う世界は決して善いものにはならない。

だいたい、たまには道を外れてもいいのが人生というものだ。その上で、やっぱり道を走ることが大事だと思えば、また戻ればいいし、みんなが走る道は地獄行きだなと思えば自分で道を切り開けばいい。だが、そうするためには、

言われた通りにするだけではなく、たとえ苦しく困難だとしても、一度は自分自身で、倫理について、世界について考えることが必要だろう。だから、「存分に考えていい」のである。

二〇一七年七月

佐藤岳詩